

熊本県 Kumamoto Pref. (肥後 Higo)



熊本市河内町のみかん畑から

熊本県では、中西部の有明海沿岸地域を中心に県内各地から、有明海越しに“[北東面～南西面\(時計回りに180度\)の雲仙岳](#)”が眺望できます。空気が澄んだ日には、北東部の阿蘇地域から、白川流れる熊本平野越しに眺められます。また、南部の八代海沿岸地域では、八代平野・八代海を手前に、天草の島々や宇土半島越しに雲仙岳が眺められます。非常に空気が澄んだ日には、南東部の白髪岳や市房山からも眺望することができます。

有明海沿岸の荒尾市～宇土市や天草地方では、雲仙岳が小中学校の校歌にも登場し、地域で古くから親しまれてきたことが分かります(県内各地の情景を歌った“火の国旅情”にも登場します)。また、熊本市内で最古の健軍神社の参道は、まっすぐ雲仙岳に向かって延びており、そのラインはさらに、[阿蘇山と雲仙岳が古代創建の神社・仏閣と共に形成する大三角形](#)の一部となっています(※阿蘇地域のページ参照)。これは、肥前国と肥後国が一つだった“[火の国](#)”(肥の国)の時代から、[阿蘇山と雲仙岳が火の国の二大火山として重要視され、国づくりの際のランドマーク\(目印\)](#)として捉えられていたことを示唆しています。

両山の間には、全国一の規模を誇る有明海の干潟が広がっていますが、その干潟の泥は、かつての阿蘇山の大噴火による噴出物を白川・緑川等が日々流し込んでいるもので、それが外洋に流れ出さないのは、[雲仙岳そびえる島原半島](#)が有明海の水の出入口を狭めているためです。

雲仙岳の山岳宗教は、701年に僧・行基によって開かれたとされますが、行基は初め天草方面から雲仙岳を眺望し、“あそこで修行をしよう”と決意して島原半島に向かったと言われています。行基の開基した温泉山満明寺の由緒を記した“温泉山縁起”によれば、本尊の四面大菩薩は朝鮮半島北部の高麗(高句麗)から雲仙岳西麓に飛来し、そこで遭遇した阿蘇大明神(阿蘇山の山岳宗教の中核であった阿蘇神社の祭神)からの助言を得て雲仙岳に鎮座した、とされています。

中世の時代には、島原半島・天草地方ではキリスト教の布教が進み、キリシタン大名のもと、南蛮貿易で繁栄しましたが、豊臣秀吉・徳川家康によるキリスト教禁教以降、領主の交代も相まって、厳しい信徒弾圧や過酷な徴税によって領民の不満が高まって行き、有名な“島原・天草一揆”へと突き進みました。両地域で一斉蜂起した一揆軍は、やがて雲仙岳南麓の原城に集結し、籠城して善戦するも、12万人の幕府軍の前に敗れ、一揆軍約37000人はほぼ全滅しました。これにより、両地域の一部には史上空前の“無人地帯”が発生し、幕府は九州諸藩(肥後細川藩を含む)や全国の天領から住民を集めたため、両地域には多様な文化がモザイク状に分布する独特の風土が形成されました。現在、両地域は雲仙天草国立公園、雲仙天草観光圏に指定されており、両地域の自然・歴史の並々ならぬつながりを感じることができます。

上記のようなストーリーを楽しめる散策道として、九州全県をつないで一周するトレイル“九州自然歩道”があり、県南から阿蘇地域、県北地域、宇土半島、天草の島々まで、雲仙岳が眺望できるスポットを点々と通りながら、トレイルは遥か雲仙岳まで続いています。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、熊本県内を旅してみませんか？